

年のおわりをしつとりと

清水 光子

「先生、うちのT、どうなんでしょう？上の子が学校でカレンダーをつくったのを見てまねして書いたはいんですけど、十二月の次に、三月なんてかいているんです！」「まあ、Tちゃんらしくて面白いこと！」と笑って応じて「お母さん、お叱りにはならなかつたでしょうね？」ときく。「ええ…まあ…」とあいまいな返事。どうやらそのときの情景が見えるようだった。

「Tちゃん、発想がユニークで、すばらしいんですね。時刻でも十二時、十三時、十四時なんていうことあるから、そんなこと考えたのかもね。でも、十二月の次はお正月で一月になるのを教えてあげればいいですよね」と応じた私。

今年も十二月になった。学校関係の年末は三月なのだが、二学期という学期は、一学期

とも三学期ともちがうようで、その終りの十二月はその意味で、一寸振りかえり、立ちどまってみたい月である。家庭では別な意味があるのはもとよりのこと。

秋の行事や、遊びがお天気都合などで十二月にずれ込むことがあったりして、そうではなくても心忙しい気持ちで大人達をかり立てる。

落葉たく 煙けむの香まとう 幼子おなごの ひとときうたう 我が膝ひざにきて

木俣 修

十月に掘ってきたおいもを落葉で焼いてたべる焼芋がやっとできた。ふと気がつくとき、木の枝をくべている私のそばへ「けむいけむい」と言いながらも、二、三人が来て、〃垣根の垣根の曲りかど〃とうたいながら、又ついと行ってしまふ。

この間からしきりに狼ごっこ（三匹の子豚や、赤ずきん、七匹の小山羊などのヴァリエーションのような遊び）をしていた四歳の子どもたちが、観客席を作ってお客（自他のクラス）にみせる。五歳児のクラスは十一月に拾って来た木の実、草の実木の葉などで、さまざまなものを、コマ、お人形、アクセサリーなどつくり溜めて来て、これは計画的に売り出しが催される。ゲームコーナーもあって、それには賞品まで用意されている。福引はもとよりのこと。終わりには〃SALE〃という貼り紙が出されたり、〃本日はおわり、またあした〃など。この遊びは賑やかに何日かつづく。活気に満ちた日々、保育者も充実感を味わう十二月。

それなのに、近頃の小学校低学年の子どもは式の計算はできるのに、実物で、例えばあめやえんぴつで加えたり、減ひいたり、掛けたり割わったりができない、という歎きをきいた。どんな幼児期の遊びを、熱中した遊びをした子らなのだろうと、私、老婆はふしぎでならない。

少し冷えこんで、朝、水霜が降りた日、温風ヒーターの前の敷物に座って絵本をずっとみていたU子が、つっと立って、ロングスカートをはいて、ままごとコーナーに行って立って何か考えている。若い保育者が少しはなれたところからそれを黙って見ている。それらをおばあちゃんは少し胸をあつくしてみている。まるでいたちごっこで、絵になるな、など感じる。

倉橋惣三先生の育ての心に「ひきつけられて」という一節がある。「子どものいたずらに、ついひきつけられて叱ることを忘れている人。子どもの今の心もちにひきつけられる人。それだけでは教育になるまい。しかし、教育の前にまず、子どもにひきつけられてこそ、子どもへ即つくというものである。」と。

落葉樹は殆ど葉をおとして、林の中は意外にあかるく、やさしい日射しに空気がぬくもっている公園で、何かの建物の跡らしい石のくぼみを五歳児のM子とK子が覗いてひそひそやっている。近づいた私に気づいて、唇に指をあて、くぼみを見よ、と示す。そっとのぞいてみて、冬眠中の蛙をみた私、黙って二人にうなずき、お互いに瞳を輝かしあった。

冷たい雨が小やみになって、傘を畳んで歩いている小みちで、六歳位の男の子三人が、

道ぶちのマンホールのふたにかがんで何かみている。好奇心まる出で近づいた私に、その中の一人がふいに立ち上って「おばちゃん！ 何？」と少し咎めるような声音で言う。あわてて、たじろいだ私、「何みているのかと思って！」と我が好奇心をなだめてはなれた。三人も、ややあって、傘をふりながら走り去る。幼い子ども達の敏感な心の波動の振幅にあわせることのむずかしさ、しかも、少しでも教育という匂いがあったりすると子ども心のチューナーはうまく作動しなくなるのか、と思いつながら。

子のころ なにをわびしむ そろばんもて おのれのかおを こすりあげおり

坪野 哲久

子どもの内に潜む未知の領域の、大人のさかしらな理解を超えている……と大岡信氏は書いておられるが。

“お正月がくると、一つお年が多くなる。うれしいなうれしいな”とうたったのはもう半世紀前の子ども。今の子ども達は“もういくつねるとお正月”とお正月を待つ喜びはあるのだろうか。お正月よりクリスマス、そしてプレゼント。お正月はお年玉、と、物とのかかわりにばかり関心や期待がかたむいているのではないかと悲しい。

ともあれ、日に日に日足は短くなり、冬至になり、世のいとなみが増えますますますせわしくなる。保育日誌をひもといて、一学期、夏休み、二学期と辿ってみる。ひとりひとりの子ども

もの姿を。倉橋惣三先生が「育ての心」の中の「感情清算」で言われていることは胸に
よみがえらせ、また「とげ」の中で、「わたしたちの目にとげはないか。わたしたちの言
葉にとげはないか。わたしたちの気分にとげはないか。」との一節を思う年の暮である。

ナツメロでもめったにうたわれなくなった「冬の夜」の「ともし火近く、衣ぬう母は、春
の遊びの楽しさ語る。居並ぶ子どもは指を折りつつ、日数かぞえて喜びいさむ……」のあ
の「炉辺味」（育ての心）にある「こっくりした、濃やかな、わざとらしさのない、味わ
いのある雰囲気を」、今年の暮に希むのはひどい時代錯誤と笑われるだろうけれど……

暮も押しつまった或る日、兎の餌にする野菜のくずを、いつもの八百屋さんへ〇君と貰
いに行った。大忙がしのおじさん「うんと沢山持っていきな、兎に暮も正月もねえもん
な。暮だ、正月だって、いやだねえ……。（人間って……）」

「時計があったってなくったって、この一日にはかわりがないじゃないか……」とつぶや
いた小川未明の童話「時計のない村」の一節を思いあわせたことであった。大宇宙の中
小さな一つの星である地球、その中に生きる小さな小さな存在の人間、だから何も年忘れ
したって意味はないのだ、などと言うのではない。むしろ、厳然たる時の流れの中の過
去と未来のはざまにある現在のひとときを、かけがえのないひとときを、たとえいまわしい過
去であってもそれは取りかえしのつかないものとして現在につながっている（森本哲郎・
「ことはへの旅」より引用）ひとときを、子ども達、私などよりずっとずっと偉大な未来を

もつ子どもらと、大切にしたいと思う。

ベートーベンの第九があちこちで演奏される。私も毎年ききにいく。ベートーベンという天才が、自身の人生に悪戦苦闘し、それに勇ましく堪えぬぎ、遂に勝って、彼が人生について考えた究極をあらわそうとして、シルレルの歓喜の詩をことばとして借りさえもして——音楽の形式としては当時新機軸という——。花々しく歓喜の歌を唄いあげたという（兼常清佐著「音楽概論」より）第九。毎年指揮者がちがっても、きくホールがちがっても、いつも背筋を貫き走るようなあの感動はかわらない。

やがて除夜の鐘に送られて、二十一世紀へ又一つ近づくお正月を「昔の子ども」は待つのである。ほんとうの子ども達と。「自然は実業家でも雇主でもないが、私たち人間は自然の一員である」ことを感じながら。

（音羽幼稚園）

